【7】螺髻梵志の住生活

［0］次に、螺髻梵志がどのようなところに、どのように住んでいたかという、住生活に関する資料を紹介する。

［1］螺髻梵志の住処はアーシュラマ（Skt.; āśrama ，Pāli; assama）と表現される。漢訳経典では原語が知られないので、ここでは漢訳聖典は調査対象から除外する。なお先の螺髻梵志資料は分かるものについては、このアーシュラマがどのような場所にあったのかも注意して紹介したものである。

［1-1］三迦葉の住処もアーシュラマと称されていたことはすでに述べた。

［1-2］三迦葉以外で、螺髻梵志の住処をアーシュラマと呼ぶ他の原始聖典資料には〈1〉〈22〉〈26〉〈27〉がある。このうち〈22〉と〈26〉は前述したケーニヤ梵志に関するものである。

［1-3］後期聖典資料には次のように多数ある。〈1〉〈2〉〈3〉〈5〉〈6〉〈7〉〈9〉〈10〉〈11〉〈12〉〈19〉〈22〉〈35〉〈36〉〈38〉〈39〉〈40〉〈41〉〈42〉〈43〉〈46〉である。後期聖典資料として紹介した全体は50資料であって、その内の21資料がさりげない形で、螺髻梵志の住処をアーシュラマと表現しているのであって、これは決して偶然のことではなく、螺髻梵志とアーシュラマという言葉が密接な関係にあることを物語るであろう。

［1-4］*Jātaka*などの後期聖典を除く原始聖典において、螺髻梵志の住処以外にアーシュラマ（assama）という語が使われている例を調査してみると次のようなものが見いだされる。

『パーリ律』の第6僧残（vol.Ⅲ　p.147）には、Maṇikaṇṭha竜王がガンジス河の辺りにあったその弟の仙人（isi）のアーシュラマを訪れることが描かれている。

*MN.*26‘Ariyapariyesana-s.’（vol.Ⅰ　p.160）では、バラモンのランマカ（Rammaka）の住処として使われている。これは舎衛城鹿子母講堂の近くにあったPubbakoṭṭhakāという川の側にあって「愛楽すべき（ramaṇīya）」「清適（pāsādika）」なところで、多くの比丘たちが集まって法談をしていたとされる。

*SN.*003-003-004（vol.Ⅰ　p.100）には、「智慧ある者は、生まれは卑しくても行いが立派で、忍辱と慈悲があり、聖なる行いのある人を供養すべきである。楽しいアーシュラマを作って（kāraye assame ramme）、多聞の人を住まわせよ（vāsayettha bahussute）」という偈がある。しかしこの「多聞の人」は前後の関係から沙門ではないと思われる。

*SN.*011-001-009（vol.Ⅰ　p.226）には、戒を持ち、善法を持つ仙人たちが（isayo）阿蘭若の草葺きの小屋（araññāyatane paṇṇakuṭī）に住んでいたことが記されており、それがアーシュラマ（assama）と呼ばれている。

*AN.*003-124（vol.Ⅰ　p.277）には、釈尊がカピラヴァットゥに行かれたとき、釈迦族のマハーナーマはそこには泊まるのに適当なところがないので、Bharaṇḍuka Kālāmaという昔の梵行者（purāṇasabrahmacārin）のアーシュラマ（assama）に案内したとされている。

*Suttanipāta*の‘Pārāyanavagga’vs.976～（pp.190～）に登場するバラモンのバーヴァリ（Bāvari）はアーシュラマ（assama）に住していたとされる。彼には‘jaṭila’という言

葉が用いられていないけれども、「真言に通じ（mantapāragū）」「無所有を求め（ākiññanaṃ patthayāna）」ており、「落ち穂を拾い、果実を食べて（uñchena phalena）」とされるから、おそらく螺髻梵志であったと思われる。

このようにアーシュラマは一般人の住処として、あるいは仏教の比丘の住処としても、おそらくその他の沙門教の修行者の住処としても使われることはなく、仙人やバラモン教の修行者の住処についてのみ用いられる用語であることが解る。

［2］螺髻梵志のアーシュラマの住まいは「草庵（paṇṇasālā）」と表現されることが多い。草で覆われた粗末な小屋であったのであろう。

［2-1］すべて後期聖典資料であるが、次のようなものが見いだされる。〈1〉〈2〉〈5〉〈6〉〈7〉〈11〉〈12〉〈19〉〈23〉〈24〉〈26〉〈27〉〈29〉〈30〉〈32〉〈38〉〈40〉〈41〉〈42〉〈43〉〈46〉である。

［2-2］以上のように螺髻梵志が「草庵（paṇṇasālā）」に住んだとするのは後期聖典のみである。ただし *SN*.011-001-009（vol. I　p.226）には戒を持ち、善法を持つ仙人たち（isayo）のアーシュラマが「草葺きの小屋（araññāyatane paṇṇakuṭī）」とされている。後期聖典が制作された時代の仏教では僧院生活が一般化していて、螺髻梵志の住生活とは相違を生じており、それが反映して特記されたものとも推測される。

［3］アーシュラマ（assama）と草庵（paṇṇasālā）について一言しておきたい。

［3-1］‘āśrama’はR. S. McGregor の *The Oxford Hindi-English Dictionary* では、a stage（of which there are four）in the life of a brāhmaṇ のほかに、abode（as of a hermit or devotee）; refuge ; sanctuary という訳語が与えられている。おそらくアーシュラマは建造物を意味するのではなく、修行に適した場所・地域を指すのであろう。原始仏教聖典では仏教の沙門が住む住処をアーシュラマと表現するところはなく、バラモン教の修行者が住する所に限定されているから、これは一般的に使われる普通名詞ではなく、螺髻梵志と言われる宗教者たちの集まる地域、換言すれば「聖地」を意味すると考えてよいであろう。

一方「草庵（paṇṇasālā）」は言うまでも住居を指すのであって、アーシュラマに建てられた建築物である。しかし‘paṇṇa’は「樹葉」を意味し、‘sālā’は「会堂」「講堂」などとも訳される場合もあるが、ここでは「小屋」程度のものであったであろう。したがって「草庵」という訳語を採用した。

［3-2］上記資料に見られる、それらアーシュラマや草庵のある場所を明記されている範囲で整理してみると次のようになる。ウルヴェーラーは「村」と考えた。また町や村の郊外は「阿蘭若」と考えた。なお単に雪山地方とするものは「山」としたが、山にある「森」や「阿蘭若」の場合がありうる。ここには三迦葉に関する資料も加えた。資料番号を付していないのがそれである。

村

ウルヴェーラー：（ウルヴェーラ・カッサパ）*Vinaya*（vol. I　p.024）

ウルヴェーラー：（ウルヴェーラ・カッサパ）*Apadāna* 003-054-535（p.481）

ある村：後期聖典資料〈23〉*Jātaka* 089‘Kuhaka-j.’（vol. I　p.375）

渡し場

Cetiya 国の Bhaddavatikā 村の Ambatittha（マンゴー樹の渡し場）：原始聖典資料〈27〉*Vinaya*「波逸提 051」（vol.Ⅳ p.108）

Bhaddavatikā の Ambatittha（マンゴー樹の渡し場）：後期聖典資料〈22〉*Jātaka* 081‘Surāpāna-j.’(vol. Ⅰ p.360)

岸辺

Candabhāgā 河の岸辺：後期聖典資料〈7〉*Apadāna* 03-42-409（p.367）

ヒマラヤ山中の Migasammatā 河から半クローシャ離れた所：後期聖典資料〈43〉*Jātaka* 540‘Sāma-j.’（vol.Ⅵ p.073）

Aṅguttarāpa 国の Āpana という町のおそらく郊外：原始聖典資料〈22〉*Suttanipāta* 003-007（p.102）

Āpana という町のおそらく郊外：原始聖典資料〈26〉*Vinaya*「薬犍度」(vol. Ⅰ p.245)

Bārāṇasī の近くの阿蘭若（araññа）：後期聖典資料〈36〉*Jātaka* 492‘Taccha-sūkara-j.’（vol.Ⅳ p.346）

ある国境の村に近い阿蘭若（ekaṃ paccantagāmaṃ nissāya araññāyatane）：後期聖典資料〈24〉*Jātaka* 138‘Godha-j.’（vol. Ⅰ p.480）

雪山地方の阿蘭若の大道からあまり離れていないところ（maggato avidūraṭṭhāne）：後期聖典資料〈32〉*Jātaka* 438‘Tittira-j.’(vol. Ⅲ p.537)

森（aṭavī, vana）

森：後期聖典資料〈26〉*Jātaka* 162‘Santhava-j.’（vol. Ⅱ p.43）

マガダなどの３つの国の間にある森（Magadharaṭṭhādīnaṃ tiṇṇaṃ raṭṭhānaṃ antare aṭavī）：後期聖典資料〈35〉*Jātaka* 490‘Pañcūposatha-j.’(vol. Ⅳ p.325)

Godhāvarī の河岸の Kaviṭṭha 林（vana）：後期聖典資料〈38〉*Jātaka* 522‘Sarabhaṅga-j.’（vol. Ⅴ p125）

雪山地方にある５種の蓮華に覆われた池の近くの美しい森（Himavantapadese pañca - padumasañchannaṃ saraṃ nissāya ramaṇīye vanasaṇḍe）：後期聖典資料〈40〉*Jātaka* 532‘Sona-Nanda-j.’（vol. Ⅴ p.312）

３由旬もある深い森の中（tiyojanike vanasaṇḍe）：後期聖典資料〈42〉*Jātaka* 538‘Mūgapakkha-j.’（vol.Ⅵ p.021）

バーラーナシーの河岸のマンゴーの林（ambavane）：後期聖典資料〈29〉*Jātaka* 344‘Ambacora-j.’（vol.Ⅲ p.137）

山

雪山：後期聖典資料〈10〉*Apadāna* 003-049-484（p.426）

雪山の近くの Lambaka という山の森の中：後期聖典資料〈1〉*Apadāna* 003-001-001（p.015）

雪山から遠くない Nisabha という山の森のなか：後期聖典資料〈2〉*Apadāna* 003-003-021（p.067）

雪山の近くの Anomā という山：後期聖典資料〈5〉*Apadāna* 003-041-402（p.345）

雪山の近くの Paduma という山：後期聖典資料〈6〉*Apadāna* 003-041-407（p.363）

雪山の近くのSamaṅgaという山：後期聖典資料〈11〉*Apadāna* 003-050-495（p.437）

雪山地方にあるDhammakaという山：後期聖典資料〈19〉*Jātaka*‘Nidānakathā’（vol. I p.006）

雪山地方：後期聖典資料〈27〉*Jātaka* 251‘Saṃkappa-j.’（vol. II p.272）

山麓：後期聖典資料〈9〉*Apadāna* 003-049-479（p.419）

雪山から遠くないDhammakaという山：後期聖典資料〈12〉*Buddhavaṃsa* 02‘Dīpaṅkarabuddhavaṃsa’（p.006）

雪山地方（Himavantapadesa）：後期聖典資料〈39〉*Jātaka* 526‘Naḷinikā-j.’（vol. V p.193）

雪山（Himavanta）の南側のガンガー河と自然にできた湖水の間：後期聖典資料〈41〉*Jātaka* 535‘Sudhābhojana-j.’（vol. V p.407）

以上によればアーシュラマは町や村の中など人気の多いところにはない。ウルヴェーラーを村にしたが、おそらく村の外であって阿蘭若と考えるべきであろう。

一方後期聖典では、雪山が螺髻梵志のアーシュラマのある場所のイメージとなっていたようである。またこの数字は誇張されているとは言うものの、８万４千人あるいは４万人の弟子たちと集団的に生活できるような環境は、深山幽谷という場所ではないであろう。「雪山地方の大道からあまり離れていないところ」（*Jātaka* 438‘Tittira-j.’）ともされるように、雪山地方ではあるけれども深山幽谷ではなく、人々と交流できるような村の郊外の静かな場所に作られたのであろう。雪山や雪山近くの山の森の中などに、今のヒンドゥー教のサドゥーたちが形成するようなアーシュラムを作って生活していたものと考えられる。釈尊の初転法輪の地である仙人堕処（Isipatana）はまさしくそういう場所であったのであろう。

［3-3］アーシュラマは住処を意味する言葉でもあるが、ヒンドゥー教における生活階梯をも意味する。法典類において住処としてのアーシュラマが用いられるのは四住期のなかでは第３の林住期であって、第４の遊行期は住処としてのアーシュラマには住しないから、その意味では住処としてのアーシュラマと人生ステージとしてのアーシュラマが重なるのは第３の林住期である。

P. Olivelle氏の“*The Āśrama System*”によれば、‘āśrama’はサンスクリットの語彙においてはヴェーダ時代のサンヒターやブラーフマナ文献のなかには見出されず、初期のウパニシャッドにすら見出されない比較的新しい用語で、インドの歴史の特定の時代に新しい観念を表わすために、あるいは新しい現象とか制度を示すために、新語として作り出された言葉ではないかという。この言葉の語源は√śramで、二つの意味を持っている。第１は「疲れる、へとへとになる」という意味であり、第２は「骨折って働く、苦労して移動する、努力する」という意味であって、目的のために非常な努力をするという意味を含んでいるとする(1)。このようにアーシュラマが新しい用語で、もともと厳しい修行をするという意味を有するものであるとすると、最初は阿蘭若のような場所で修行すること自体を「アーシュラマ」と呼び、やがてその場所もアーシュラマと呼ばれるようになったのかも知れない。そしてこの言葉は主にバラモン教の系統においてのみ使われ、仏教などには使われなかったのであろう。

（1）Patrick Olivelle, *The Āśrama System , The History and Hermeneutics of a Religious*

Institution, Oxford Univ., 1993, pp.008～009.

［4］螺髻梵志は露地・樹下に住していたという記述もある。

［4-1］原始聖典資料は〈8〉と〈15〉で、「地上の横臥（thaṇḍilasāyikā）」も取るにたらない修行で、疑惑を断じないものを清めない、とするバラモン批判の文章の中に含まれる。

［4-2］後期聖典の中にも次のような資料が見いだされる。資料〈12〉〈19〉は「草庵を捨てて樹下（rukkhamūla）に住む」とし、〈46〉は「地上に臥す（chamā seti）」とする。また〈48〉は『根本有部律』「出家事」であるが、バラモンの修行項目の中に「地臥」を入れている。

［4-3］先に身体に泥や灰を塗るということも行われたことを紹介した。おそらくその一環として地上に寝ることも行われたのであって、当時の宗教者の一般的な修行方法の一つであったのであろう。仏教の基本的な生活方法を示す四依法（cattāro nissayā）にも樹下坐は含まれている。

［5］集団で生活していたことを推測させるものもある。

［5-1］三迦葉に関する記事はすでに紹介した。

［5-2］原始聖典資料ではその他に、先に紹介したケーニヤに関しては資料〈22〉では「アーシュラマに住む螺髻梵志たち（Keṇiyassa jaṭilassa assame jaṭile）は、一部の者たちは（appekacce）かまどを掘り、……一部の者たちは座席を設けた」とし、〈31〉では「ある者は薪を割り、ある者は飯を作り、ある者は水を取った」とする。この文面からは彼らは集団でアーシュラマに生活していたことを物語るが、しかしケーニヤは出家者ではなく、在家者である可能性もないではないことはすでに述べた。

［5-3］後期聖典資料の〈34〉には「苦行者たちの集団（tāpasagaṇa）」、〈38〉には「仙人たちの集団（isigaṇa）」という用語が見いだされる。

［5-4］次も後期聖典であるが、漠然と複数の修行者が一つ所に住していることを述べたものである。〈1〉は「2万4千人の弟子」、〈5〉は「仙人たちが（isayo）私のアーシュラマに住んだ」、〈6〉は「8万4千の苦行者（tapassin）はアーシュラマに集まった」、〈7〉は「螺髻（jaṭā）にして荷を担い、鹿皮の上衣を着け、樹皮の衣を着た人たち全てが私のアーシュラマに住んだ（sabbe vasanti mama assame）」、〈9〉は「弟子たちは川の流れのごとくに（nadīsotapaṭibhāgā）私のところにやって来た」、〈10〉は「弟子が8万4千人いた」、〈11〉は「4万人の弟子たちが（sissā）私に従っていた」、〈32〉は「若いバラモンたちも各自の草庵を建てた（māṇavā pi attano attano paṇṇāsālaṃ kariṃsu）」とする。

［5-5］家族（両親と兄弟）で生活したというものもある。後期資料であるが〈40〉は「両親（mātāpitaro）と弟と一緒に出家して、アーシュラマを作って住んだ」、〈46〉は「妻と2人の子を連れて出家してアーシュラマに住んだ」とする。

［5-6］上記の中にも「夫婦」は含まれるが、原始聖典資料〈32〉は「その時、王の長生と第一夫人は逃走して、波羅榛国に至り、螺髻婆羅門に仮作して、夫婦で陶師の家に住んだ」とする。「仮作」したのであるから本当の螺髻梵志になったわけではないが、しかし「夫婦」の螺髻梵志もありえたことを物語る。

また次節で考察するように、螺髻梵志の望まれる生活法が落ち穂を拾って生活することであったとすると、*SN*.001-004-002（vol. I　p.019）の「落ち穂を拾って生活し（samuñchakaṃ care）、妻を養う者（dāram posaṃ）も乏しき中から施す者は法を行う者であり、千の供犠を行う者（sahassayāgin）の百千の供犠もこのような者の百分の一に値しない」という句も螺髻梵志に関して述べられたものとも解釈することができる。そうとするとここからも螺髻梵志が「妻を養う」場合があったことを推測せしめる。

［5-7］若い男性と女性が結婚して一緒に住んだというものもある。後期聖典資料の〈43〉である。ただしこれは、銘々が草庵を作って（attano attano paṇṇasālaṃ pavisitvā）、沙門の法を行じていた（samaṇadhammaṃ karontā）とする。しかしこの後に、帝釈天の勧めによって自分たちの世話をさせるために息子を作ったとされる。これは妻が月経のときに、夫が臍をなでることによってなされたことになっている。

また資料〈39〉は菩薩は出家して螺髻梵志になったが、後に１匹の牝鹿（migā）との間に子供を作ったという。これが「一角仙人（Isisiṅga）」である。後にこの一角仙人も女性に誑かされて男女の交わりを行い、禅定を失ったとされる。これは「夫婦」で生活したという例ではないが、しかし男女の交わりを仏教のように厳格に禁止する「戒律」のようなものはなかったものと思われる。もしそのような認識があれば、それが「女」というもので、それが「交接」であるということを知らないで交接するということはないであろうからである。

［5-8］上記のように螺髻梵志たちが多数集まって、集団で生活していたと思わせる記述があり、‘saṃgha’という用語は見られないが‘gaṇa’という用語が用いられている。後期資料〈34〉には彼らが「集まって阿闍梨の地位を与えた」というように、会議のようなこともなされていたことも推測させる。またその集団には阿闍梨と弟子という師弟関係があったことは、多くの資料に語られている。三迦葉が 500 人、300 人、200 人の螺髻梵志の‘nāyaka’‘vināyaka’‘agga’‘pamukha’‘pāmokkha’であったとすることもこれを表すであろう。

しかしだからといってこれが仏教的な現前サンガを連想させるかといえば必ずしもそうではない。まず三迦葉たちが‘ācariya’や‘nāyaka’‘vināyaka’‘agga’‘pamukha’‘pāmokkha’と呼ばれたとしても、六師外道のように‘saṃghin’‘gaṇin’‘gaṇācariya’などとはしないことに注目すべきであろう。螺髻梵志たちの集団は、おそらく基本的には阿闍梨と弟子の個人的な関係の集積であって組織化されたものではなく、だからこそ‘saṃghin’‘gaṇin’‘gaṇācariya’とは呼ばれなかったのではないかと想像される。

またアーシュラマに集まって集団的な生活をしていたとしても、後期聖典資料〈32〉が「若いバラモンたちも各自の草庵を建てた（māṇavā pi attano attano paṇṇāsālaṃ kariṃsu）」とするように、彼らは一人ひとりが別の草庵に住んで、仏教の比丘のように僧院に住したわけではない。確かに仏教でも最初から僧院に住していたわけではないが、しかし三迦葉などの螺髻梵志たちの集団生活が仏教サンガのモデルになったとは考えられない。なぜなら釈尊はそういう集団生活なら三迦葉を待たなくとも、鹿野苑の仙人堕処ですでに経験されていたからである。「仙人堕処」は地名が物語るように、仙人とも呼ばれる螺髻梵志たちが集まるようなアーシュラマであって、釈尊はこの地で五比丘やヤサ、そしてヤサの友人 54 人と一緒に集団生活されたが、これがまさしくここに言うような、螺髻梵志たちの集

団生活のような生活であったものと考えられるからである。

　このように螺髻梵志たちはアーシュラマに集まって生活することがあったようであるが、しかしそれは後の仏教サンガのような組織化された集団ではなかったと推測される。そういう意味で釈尊教団のサンガのモデルがあったとするなら、それは舎利弗・目連の師であったとされるサンジャヤなどの六師外道の組織である。その一々の釈尊との先後関係については調査しなければならないが、少なくともサンジャヤは釈尊が教団活動を始めた最初期にはすでに‘saṃghin’‘gaṇin’‘gaṇācariya’と呼ばれ得るような組織を持っていたわけであり、「律蔵」の「受戒犍度」では舎利弗・目連が帰信した直後に、和尚と弟子の制の制定と白四羯磨による授具足戒が定められたことになっているから、おそらくそれが契機となったものと推測される。